

# 国学者と読書行為に関する一試論

—相馬高玉家宛平田篤胤書簡にみる書籍の出版・流通—

遠藤 潤

作者が書物を書かないというのは事実であり、彼らはテキストを書くのであって、それらが手で書かれたり、版刻されたり、印刷されたりして…書かれたモノとなるのだ。このズレがまさに意味が構築される空間である。

—ロジェ・シャルチエ「読者共同体」(1)—

## 1. 思想研究と運動研究をむすぶもの ——モノとしての書物——

平田篤胤およびその後継者たちの思想・活動については、これまでさまざまな側面からの分析が試みられてきた。一方では篤胤のテキストの読解・検討によって彼の構成した宗教的な思想が考察され、他方、社会運動に着目した視点からは幕末の政治運動に積極的に参加する気吹舎門人たちの姿が見いだされた。典型的には、テキストを生産する篤胤とそれを受容し行動へと展開させる門人たちといった対照的な像が描かれたのであった。この両者の像はある意味でたがいに孤立した性格をもっている。篤胤の思想についての考察は、彼のテキストの影響をうけて書かれた諸テキストの分析までを範囲としつつも、幕末の国学運動までは届かず、一方、運動の思想的原因の検討については篤胤のテキストまでたどりついているとは必ずしもいいがたい。次なる段階として求められているのは、この両者をむすびつけ統合的にとらえる研究視点である。

そうした模索のうち、近年一部の研究者にあらためて着目されているのが平田派の読書活動である。最近のこの動向は、西洋史学における「読書の社会史」の影響を受けて、思想史のとらえ直しを試みる動きの一環をなしており、平田派に関しては例えば桂島宣弘が論じている。(2) ただし、これは篤胤の時代を中心とし、しかも言及する対象は書かれたテキストに限定されており、同じ特集の主旨を語るさいにひきあいに出されているシャルチエらの「読書の社会史」とは根本的に異なる性質の論考であった。

平田派を「書物」という視点からとらえ直すことは、思想論と組織論を架橋する試みを意味する。フランスを中心として展開される「読書の社会史」は、冒頭にあげたシャルチエのことばのように、テキストと書物とを区別し、モノとしての書物が現実の中でどう成立し、人々がいかに関わっていったかを具体的に考えることで、思想と社会の関係をとらえようとする研究視角を提示した。平田派について前述のような架橋、すなわち篤胤の思想と幕末の政治運動の関係をとらえようとするならば、むしろ書物の出版と組織拡大が活潑化する篤胤没後こそを対象とするのが適切であろう。そして、そこでの書物を取りまく門人たちのさまざまな動きを具体的に追うことで、そうした問題に新たな光をあてることができると考えられる。

近世後期の日本における出版一般を考えるばあい、テキストがモノとして成立するには多くの

人々が関与することが必要だった。テキストを書く著書、テキストに書物という現実の形を与えるべく出版事業を組織する版元、テキストをもとに版下を書く者、版下を版木に彫る者、書物を摺る者、あるいは写本として世に出すべく筆写する者、書物を販売する書肆、…。篤胤がひとつのテキストを書いたときにも、それが世間に書物として出、読者がそれを読むまでには、これらの人々による幾重ものプロセスが必要だった。

「篤胤の思想が多くの人に影響を与え、幕末の社会運動へと展開した」とあっさりと言られる思想的影響論、あるいは丸山眞男が従前の垂加神道理解をさしていったことばを援用すれば「流出論」とでもよぶべき理解は、書物をめぐる諸プロセスの分析によってのりこえられなければならない。思想や教説は書物として、書簡として実際に読まれることによって、人々の血となり肉となる。

さて、国学院大学の近世社家文書研究会では、相馬の神職で気吹舎（平田派）門人であった高玉家旧蔵の書簡 300 余点の解説を進めている。その多くを占めるのは、安政年間から当時の気吹舎当主平田鏡胤からの書簡である。このうち、嘉永 5 年 (1852) から安政 3 年 (1856) にわたる 50 点については近く翻刻が刊行される。この翻刻には、梶山林継が書簡の由来や概略について解題をよせている。<sup>(3)</sup> これら 50 点の書簡は高玉家書簡全体からすると部分的なものではあるが、これらを対象として検討を加えることで、試論的に気吹舎の書物をめぐる活動の一端を具体的に明らかにしていきたい。

## 2. 書籍売買と書簡 —— 論点からみた史料の性格 ——

気吹舎における書籍の売買は、書簡での連絡によって行われていた。高玉家旧蔵の書簡をみるかぎり、その基本的あり方は次の通りである。

【史料 1】安政 3 年正月 8 日付（整理番号 47）

今般、五十音義訣全四冊、弘仁歴運記考一冊、日契歴當分之所二冊、差上申候。御受取可被下候。料は別紙之通り御承知可被下候。

…（中略）…

又申候、此度神代御系圖小折本出来候間、先六帖差上申候。大井御初御連中へ御配分可被下候。御入料ハ壹帖ニ付銀五匁つゝに御座候。

【史料 2】安政 3 年 2 月 28 日（整理番号 49）

五十音、歴運記考、日契歴、小折本六部、以上代メ式両三朱と錢五十文之所、金式両式分此度御遣し被下、慥に受取申候。此外、真綿代式分、都合三両也、受取申候。但し壹分一朱程過に相成申候得共、右は以前の書物代之内へ受取可申候旨、承知いたし候。

高玉家は鏡胤宛の書簡で書籍の注文をする。鏡胤はその注文を受けて配本状況（この便で送る、のちの便で送る、など）、および料金をつづった書簡とともに書籍を高玉家に送る。高玉家では、この書簡にもとづき代金をその後の書簡とともに支払う。

近世社家文書研究会が検討している書簡は高玉家旧蔵の鏡胤書簡である。すなわち、書籍をめぐる書簡の往復のうち、鏡胤から高玉家宛という一方向だけを見ていることになる。しかしながら、書籍売買の諸側面のうち、高玉家が鏡胤宛の書簡に記したであろう書籍の注文は、鏡胤が確認の意味で高玉家宛の返信に記録しており、金銭の授受についても基本的に鏡胤の出した書簡の

なかに記されている。この点で、この書簡群は篤胤没後の平田派における書籍の出版・流通の具体的過程を知るうえで非常に重要な意味をもつ史料なのである。

### 3. 配本された書籍の種類

この時期、すなわち嘉永5年(1852)から安政3年(1856)にわたる5年間に江戸の鋳胤から高玉家に配本された書籍の種類について簡単にみておきたい。

実際に授受された書籍の検討に先立って発行する側の問題にふれておきたい。気吹舎では多くの場合、これまで気吹舎から刊行された書籍、あるいは今後刊行予定のある書籍を目録にまとめ、刊行する書籍の巻末などに付していた。これには書名とともに簡単な内容紹介が記されており、当時の気吹舎がそれぞれの著書をどう位置づけていたかを知ることができる。これらの目録類については、上のような研究視点も含めて、すでに谷省吾が代表的書目の翻刻と書誌的検討および研究をおこなっている。(4)

さて、高玉家書簡をみることにしたい。これらの書簡にみられる書籍関係の記事を注文、配本、支払、連絡などに分類して整理したものを表として133~136ページにかかげておく。この表のなかでは注文した本がその後いつ配本されたかなどを追跡するために、各項目でつぎにつづく記事のあるばあいには参照先を矢印とともに表示している。

その配本の中心をなしているのは当然ながら篤胤の著書である。ただし、多く流通しているのは『古史成文』『古史伝』『霊能真柱』『出定笑語』などであり、意外に限られた種類のものである。

『玉禪』第7巻について、高玉安兄はその刊行と同時に10冊を購入しているが、彼は『玉禪』には購入者以外としても深く関わっている。すなわち第8巻の出版の助成者として参加したのである。気吹舎の出版では、助成者は当該の書物に校閲者として名前が出るのが通例となっており、この第8巻には安兄が田中年胤、内藤正臣らと名前を並べている。(5)

今回対象とした書簡のなかには、『志都の石屋』の助成者となった奥山正胤と早田弘道の名前もみられる。高玉と奥山、早田の交際は東北地方の門人ネットワークの一端をなしている。(嘉永7年2月7日付書簡[20])

篤胤の著書とともに比較的頻繁に売買されているのが門人の著書である。気吹舎は『門人著書類』という書目を上木し、篤胤の書目の一つである『伊吹能舎先生著撰書目』とともに『入学問答』『天津祝詞考』『祝詞正訓』(いずれも版本)の巻末に付した。(6)高玉家で購入した、根岸延貞『天満宮御伝記略』(7)、石川篤記『宮比神御伝記』、生田万『古学二千文』などはいずれもこの目録に掲載されており、あるいは書目を見て購入を希望するばあいもあったのかもしれない。ともかく、ここに掲載されたものについては、門人の著書は篤胤の著書同様に気吹舎から配送されていた。

ここで少し注意しておきたいのは、この時期の「著者」のあり方である。篤胤の著書には門人筆記という形式の書籍が少なからず含まれている。当然のことながら、この時期には近代的な「著者」概念が必ずしも成立しておらず、篤胤の口説を門人が筆記したばあいには、それは篤胤の著書とみなされているが、近代の書誌記述においては筆記者が著者として扱われることも少なくない。上の三部のうち『天満宮御伝記略』および『宮比神御伝記』はこうした例であり、当時は篤胤の著述とみなされていた可能性がある。

これらとは別に、鏡胤は気吹舎の書目にはない書物についても手配して発送していた。当初の『幽界物語』や一連の水戸関係書がこれにあたる。会沢安『新論』や会沢著・大江三万騎訳『雄飛論』は鏡胤が高玉家宛書簡で講読をすすめている。水戸学と平田学の関係はこれまで書籍にみられる思想的影響関係や人的交流などを中心に考察がすすめられてきたが、このようにそれぞれの書籍に対する評価に注目することで新しい角度からの分析が可能になるのである。

【史料3】嘉永6年7月22日出(整理番号9)

…龍の宮物語は先頃一寸一覽いたし候。常陸帯、筑波根風はいまだ見不申候。誰か所持いたし居可申候間、問合可申候。龍之宮も拙方には所持無之候。新論は一覽いたし候。随分宜敷ものにて御座候。右は漢文活字本にて、無点故甚読にく、御座候。其後右を片カナ交りに註解いたし候。雄飛論と申もの三冊、是も活字本にて御座候。下総人大江ノ三万騎と申人の訳註にて御座候。賣物に有之、新論は八匁位、雄飛論は廿五六匁にて御座候。先日頼まれて秋田などへ買下し申候。…

こうした動きは安兄からの注文を受けてのことが多かったが、鏡胤の方で書物を推薦する場合もあった。自分の手に入れられるものは筆工に書写させて送ったり、すぐに見つからない書物でも書肆に手配して連絡を待ったりしている。また、ときには古書の探索も約束している。

このように鏡胤から高玉家へ送られた書物をみると、鏡胤の活動が単に版元としてのものではなく、さまざまな書物を流通させていたことがわかる。

#### 4. 書籍流通の構造 —— 配本拠点としての高玉家 ——

書籍の注文から配本、支払いまでの基本的な過程はすでに述べた通りだが、その配本の構造にはどのような特徴があるだろうか。

まず目を引くのは高玉家が同一の書籍をまとまった部数購入している例である。嘉永5年5月28日付書簡における『玉禪』第7巻10冊、嘉永7年1月7日の『天満宮御伝記略』10冊や『古道太元図説』5幅などである。これは、一連の書籍購入が高玉家の需要だけではないことを示唆している。

書簡のなかにはこうした高玉家の位置を、より積極的に示す事例が記されている。

【史料4】嘉永5年5月28日出(整理番号2)

…今般玉禪七ノ巻出来候間、十冊さし上申候。可然様御分配可被下候。御入銀は壹冊に付銀六匁五分、十冊に付壹両と五匁之つもりにて御座候。宜御取斗可被下候。別段夫々へ案内はいたし不申候。…

【史料5】安政2年5月8日出(整理番号32)

…此度玉たすき八ノ巻出来候間、先つ十部也差上申候。御入銀は壹冊に付銀六匁つゝに御座候。宜御分配可被下候。御社中へ別段案内状出し不申候。此段も宜御傳声可被下候。…

【史料6】安政3年正月28日出(整理番号48)

…大祓詞増刻五六部差出し可申旨、則六帖差出申候。猶又、新刻ものは以後何にても十部は差出し可申旨、承知いたし候。…

これらの史料によれば、鏡胤は新刊書が出たときにまとめて配本し、「別段夫々へ案内はいたし

不申候」「宜御配分可被下候」「此段も宜御傳声可被下候」としており、各購読者に対する本の刊行の告知も鋳胤から直接はおこなわれず、高玉家をたよりにしていることがわかる。高玉家が周辺地域の有志に対して書籍を分配・販売する拠点としての役割を果たしていたことが如実に示されている。

一方、鋳胤は高玉家に対して、気吹舎の書籍について版本や写本の一割半引を定例としていた。つぎにあげる【史料7】がそれを示している。

【史料7】安政3年6月28日出(整理番号8)

…書物代料書付板本写本両様共差上申候。板本は右之内壱割半引、写本も大抵同様と申すくらゐに御座候。写本は其時に可申上候。…

この割引は、いくつもの書簡でくりかえし確認されている。拠点としての高玉家の働きを念頭におけば、この割引が単なる値引きではなく、書籍流通の際の手数料としての意味をもつ可能性も考えられるだろう。

高玉家の例を全国に共通する気吹舎の性格と考えるには、各地での実態の検討が必要となる。篤胤没後における気吹舎門人数の飛躍的増加、地域の有力門人を拠点とした地域の門人組織化など、これまで明らかにされてきた点を考えあわせると、気吹舎の書籍の流通において高玉家のような形態が一般化していったと推測しても、必ずしもあたらないことではないだろう。

## 5. 書物料決済の形式変更

この時期、鋳胤から高玉家への書物の配送はしだいに増加していったが、これに代金の支払い方法も変更を余儀なくされる。それは鋳胤側での処理の変化だが、当初、鋳胤は個々の書物と送付される代金とを対応づけて記録していたらしい。

それが月三度の飛脚便でつぎつぎ寄せられる注文と、その同じ書簡での送金とがしだいに混乱し、支払いの前後関係の把握が困難になったのである。そこで鋳胤は決済形式の変更を提案した。

【史料8】安政3年6月28日出(整理番号8)

…書物代御勘定之事、是迄御遣はし被下候度ごと帳面へ書入置候得共、近年は段々口々多く相成り、殊に御受取被成候御都合にて前後に相成候時も有之候。何共紛らはしく困り入申候。勿論遅速は御座候とも御間違なき御事故いかやうにても不苦事に候得共、いつ相済候哉不相済候や分らぬ事も御座候間、當年より別段帳面に相記し申候。定て御許にては遅速色々にて嚙々帳面倒と奉存候。乍去當方にては其遅速前後も委くは分り兼候間、只々此方より差上候順々にさし引勘定いたし、古き方より御勘定相済候事に相記し申候、則此度右帳面掛御目申候。御覧之上とくと御調べ可被下候。間違御座候はゞ御書入之上后便御返可被下候。折々此帳面掛御目候て取調べ可致候。…

新しい方法は、支払われた金銭を特定書物と対応させるのではなく、未納分一般に対しての支払いとみなすものだった。このような方法により、鋳胤は組織の拡大と購入書籍の増加に対応したのである。

## 6. おわりに ——読書の宗教史にむけて——

以上、嘉永5年から安政3年にわたる高玉家宛の平田鏡胤書簡を通して、当時の気吹舎における書籍の出版・流通活動について簡単ながら見てきた。書物の面から見れば、その流通の中心地である江戸に暮らす鏡胤は、気吹舎の門人間の書物流通においても中心的な役割をになっていた。それは、モノとしての書物を媒介として門人組織のあいだに情報が流通したことを意味しており、高玉家の書簡にはその組織が階層化されている姿もみることができた。有力門人を中継拠点として書物などをとおして情報・思想が流通していく。そこでやりとりされるものには、政治的なものから宗教的なもの、生活の必需品など多様なものが含まれていた。往来するモノと情報のすべてが当時の気吹舎の具体的な活動を表象しているのである。

鏡胤が秋田藩の依頼を受けて江戸で政治・外交関係の情報収集に活躍し、収集された情報のある部分が各地の有力門人たちに伝えられたことはすでに宮地正人が論じている。<sup>(8)</sup> 高玉家に届いた書物に对外関係、水戸関係の写本が多く含まれている事実は、そうした点からも検討する必要があるだろう。この点については後日の課題としたい。

書物の流通から平田国学をみたときに、新たに見えてくる光景とはいかなるものであるのか。それは一つには群をなす書物たちの布置においてである。たとえば篤胤の主著と目される『古史伝』は篤胤生前には未定稿に終わり、それは矢野玄道らが仕事をひきつぐことによって1911年になってようやく完成をみている。しかしながら、こうした事実をふまつつも、対象を篤胤執筆の部分に限定したうえで、それが篤胤の著書のなかでもっとも体系化された思考であり重要であるとする見方は有力である。これが「読者」の読書行為からみると異なった様相を呈するのである。ここでとりあげた書簡にもみえるように、『古史伝』はその刊行が段階的に行われており、読者がその体系性をはたして鳥瞰することができたのかという点については再考が必要である。また、人気のある著書として『霊能真柱』を凌駕するいきおいで『天満宮御伝記略』や生田万『古学二千文』が登場していることの意味はどこにあるのか。語り手・書き手の体系性の一方で、読者の読みの全体的な体系性や傾向性への考察がいま求められているのである。

近世社家文書研究会による読解作業も進み、高玉家書簡の全体像が明らかになる日も遠くはない。この書簡群の全体像をふまえたうえで平田国学を読書行為の観点からとらえなおすことをひとつの重要な課題としてゆきたい。

※本稿は、平成10年度(1998)神道宗教学会における共同報告「相馬の鏡胤書簡」での遠藤による発表「相馬の鏡胤書簡—平田派における書籍の出版・流通—」の内容に加筆・訂正して研究ノートとして新たに構成したものである。

## 註

- (1) ロジェ・シャルチエ「読者共同体」、長谷川輝夫訳『書物の秩序』(ちくま学芸文庫、1996年)、pp.30-31。
- (2) 『江戸の思想』5(ペリかん社、1996年)は「読書の社会史」と題して、江戸時代の思想を「読書の社会史」とかかわらせて論じる論考を特集している。桂島宣弘「桂島宣弘「平田派国学者の「読書」とその言説」(『江戸の思想』5)。
- (3) 『国学院大学日本文化研究所紀要』87、(2002年〈刊行予定〉)、梶山林継「解題」。なお、本発表

はこの翻刻の最終稿を確認しない段階で執筆されているので、そこでの史料の訂正などについては残念ながら対応していない。また、本稿での引用ではカタカナ書の助詞類はひらがなに改めてある。

- (4) 谷省吾『平田篤胤の著述目録研究と覆刻』（皇學館大學出版部，1976年）。
- (5) 『新修平田篤胤全集』6（名著出版，1977年）。
- (6) 同上。
- (7) 嘉永4年8月，関東執役戸倉胤則序，同年10月刊。『新修平田篤胤全集』補遺第2巻（名著出版，1978年），所収。この時期，菅原道真は気吹舎によって「和魂漢才」を体現する存在として再評価された。安政5年（1858）には，平田鏡胤をはじめとする人々によって天満宮境内に「和魂漢才碑」が建立されるにいたる。遠藤「幕末社会と宗教的復古運動—白川家と平田国学古川躬行を接点として—」（『国学院大学日本文化研究所紀要』83，1999年）参照。
- (8) 宮地正人「幕末平田国学と政治情報」（田中彰編『日本の近世』18，中央公論社，1994年）。なお，高玉家書簡については，国学院大学蔵となる以前に山本定男「平田鏡胤書状にかかれた水戸」（『茨城県史研究』62，1989年）が水戸学に関わる箇所について部分的に紹介しており，宮地論文はこれを援用して書かれている。

表 高玉家書簡にみる書籍の流通（嘉永5年～安政3年）

記載方法：番号 書簡の差出人→受取人（鏡は鏡胤，高は高玉家を示す） 書簡年月日（出は鏡胤から出したもの，着は鏡胤が高玉家から受け取ったもの）（整理番号）【注文】【配本】【支払】および書籍関係記事の概略

各項は，年月順に配列している。高玉家から鏡胤にあてた書簡，および年月日のないものは，鏡胤が出した，その後の書簡に記された内容から判明したもの。典拠となる書簡を「典拠（整理番号）」の形で示している。

- |                            |                           |
|----------------------------|---------------------------|
| [1] 鏡→高 嘉永5年（1852）4月7日出（7） | 【配本】『世継草』1冊               |
| 【配本】『毎朝神拝詞記』1帖             | 【推薦】徳川斉昭『明君一斑抄』（→[6]注文）   |
| 【連絡】『漢学大意』『神字日文伝』の清書       | [6] 高→鏡 嘉永6年3月27日着（典拠（6）） |
| ができた。                      | 【注文】『明君一斑抄』（→[8]配本）       |
| [2] 鏡→高 嘉永5年5月28日出（2）      | 【支払】金1両1分2朱               |
| 【配本】『玉禱』第7巻10冊             | [7] 鏡→高 嘉永6年4月7日出（6）      |
| [3] 鏡→高 典拠（4）              | 【配本】『古史成文』2部              |
| 【配本】『神代御系図』                | 『古道太元図説』5幅                |
| 『天満宮御伝記略』                  | 『古今妖魅考』2部                 |
| [4] 鏡→高 嘉永6年1月6日出（4）       | 「景山公上書」（→[10]支払）          |
| 【配本】『古史成文』2部               | [8] 鏡→高 典拠（9）             |
| 『古今妖魅考』1部                  | 【配本】『明君一斑抄』（→[10]支払）      |
| 『立言文』1幅                    | [9] 高→鏡 嘉永6年7月8日着（典拠（9））  |
| 『五徳説』1幅                    | 【注文】『龍宮夢物語』               |
| 『医宗仲景考』1部                  | 藤田東湖『常陸帯』（→[12]連絡）        |
| 『宮比神御傳記』1部                 | 『筑波根於呂志』（→[12]連絡）         |
| 『大祓詞』                      | 『古史成文』序（→[14]配本）          |
| 『彖易石圖』                     | [10] 高→鏡 典拠（9）            |
| 鈴木重胤『世継草』                  | 【支払】1分2朱（「景山公上書」『明君一斑抄』分） |
| 『漢学大意』（贈呈）                 | [11] 鏡→高 嘉永6年7月27日出（9）    |
| [5] 鏡→高 嘉永6年3月17日出（5）      |                           |

- 【推薦】会沢安『新論』(→[15] 推薦)  
会沢安著・大江三万騎訳『雄飛論』  
3巻(→[15] 推薦)  
『仙境異聞』(→[15] 配本)
- [12] 鏡→高 嘉永6年9月8日出(22)  
【連絡】『常陸帯』(→[15] 配本)『筑波根於呂志』(→[15] 配本),『幽界物語』第2巻(→[13] 配本)は筆写がおわり次第配本する。
- [13] 鏡→高 嘉永6年10月6日出(10)  
【配本】『幽界物語』第2巻(写本)(→[15] 連絡)
- [14] 鏡→高 典拠(12)  
【配本】『古史成文』序「異翰」
- [15] 鏡→高 嘉永6年11月18日出(12)  
【配本】『常陸帯』  
『筑波根於呂志』  
『仙境異聞』3部  
【推薦】『新論』  
『雄飛論』  
【連絡】『幽界物語』第3巻以降は筆写がおわり次第配本する。(→[20] 連絡)
- [16] 鏡→高 嘉永6年11月27日出(13)  
【推薦】本居宣長50歳前後のときの筆になる一葉
- [17] 鏡→高 嘉永6年12月17日(典拠(15))  
【配本】『大祓詞』3幅
- [18] 鏡→高 嘉永7年1月7日出(15)  
【配本】『天満宮御伝記略』10部  
「摺もの」1枚(進呈)
- [19] 高→鏡 嘉永7年1月27日出(典拠(19))  
【支払】書物料(金額・内容不明)
- [20] 鏡→高 嘉永7年2月7日出(19)  
【配本】「オロシヤへ之御返翰」(写)  
【連絡】『志都の石屋』講釈本, 上木開始。(→[24] 連絡)『幽界物語』第3巻・第4巻は版本とするので出版が遅れる。
- [21] 高→鏡 嘉永7年2月晦日着(典拠(16))  
【注文】「海防上書願」(→[27] 推薦)  
『立言文』2部(→[22] 配本)  
『五徳説』2部(→[22] 配本)  
『古道太元図説』4幅(→[22] 配本)  
【支払】1両2朱
- [22] 鏡→高 嘉永7年3月1日出(16)  
【配本】「大秘書」1冊  
『立言文』2部  
『五徳説』2部  
『古道太元図説』4幅  
【連絡】『神字日文傳』の清書がもうすぐ終わる。(→[24] 配本)『玉襷』第10巻は板行するが, 未清書なのでも少し待つように。
- [23] 高→鏡 典拠(20)  
【注文】「異誠よりの書翰写」1部
- [24] 鏡→高 嘉永7年6月17日出(20)  
【配本】『神字日文伝』  
「アメリカ書翰写し」1部  
【連絡】『志都の石屋』の印刷を開始した。(→[25] 注文)「異誠よりの書翰写」は近日中に送る。
- [25] 高→鏡 典拠(24)  
【注文】『志都の石屋』3, 4部(→[27] 配本)
- [26] 高→鏡 典拠(24)  
【支払】1両2朱(書物代, 金3分2朱, 糸代)
- [27] 鏡→高 嘉永7年11月7日出(24)  
【配本】『志都の石屋』3部  
【推薦】「海防の軍書類」「武備之書類」。なかでも佐藤信淵の『実武一家言』  
『水陸戦法録』『三銃用法論』『存華挫狄論』。
- [28] 高→鏡 典拠(27)  
【注文】『古道大意』5部(→[29] 配本)  
『志都の石屋』3部  
『天満宮御伝記略』2~3部  
(→[29] 配本)  
【支払】金100疋(書物代)
- [29] 鏡→高 安政元年(1854)12月8日出(27)  
【配本】『古道大意』5部  
『天満宮御伝記略』3部  
【連絡】「書物無尽」の件, 承知した。
- [30] 鏡→高 安政2年1月18日出(37)  
【配本】「秘書」(写)2部(→[31] 支払)
- [31] 高→鏡 典拠(28)  
【注文】『古史伝』(→[32] 配本)  
【支払】1両1分2朱(書物代金1両, 「秘書」の写し3朱, 「異国もの」1朱, 御年始1朱, 雁皮紙代1朱)
- [32] 鏡→高 安政2年2月17日出(28)  
【配本】『古史伝』(写本)1帙3冊  
『玉襷』1部6冊  
『古史成文』1部  
『靈能真柱』2部  
『宮比神御伝』1部



- 『天満宮御伝記略』2部  
「縣居翁真跡すり物」2葉
- [33] 高→鏡 安政2年2月19日着 典拠(29)  
【注文】『万国旗印』2, 3枚(→[35] 配本)
- [34] 高→鏡 典拠(31)  
【注文】『菅原遺誠要文解』(→[40] 配本)  
【支払】金2両2朱(書物代)
- [35] 鏡→高 典拠(31)  
【配本】『古史成文』3部  
『天満宮御伝記略』1部  
『万国旗印』2枚  
「加茂大人摺物」2幅  
『和魂漢才』1幅
- [36] 鏡→高 安政2年4月18日出(31)  
【連絡】『玉襷』第8巻が上木, 近日中に10冊送る。(→[38] 配本)『古史伝』続巻も配本希望とのこと, 了解した。現在, 『古史伝』第26巻を清書中である。「アメリカ」「オロシヤ」は近日中に送る。
- [37] 高→鏡 典拠(32)  
【支払】金100疋(『二神傳』3匁5分, 『気海観瀾』4匁5分, 『草野集』(古本)4匁, 『万国旗印』2枚・3匁)
- [38] 鏡→高 安政2年5月8日出(32)  
【配本】『宮比神御伝』  
『玉襷』第8巻(版本), 10冊
- [39] 高→鏡 安政2年5月26日着 典拠(33)  
【注文】『出定笑語』(→[52] 連絡)  
『西籍概論』  
『和魂漢才』(→[40] 連絡)  
『古史成文』2部(→[40] 配本)  
『万国旗印』4枚(→[40] 連絡)  
【支払】金2朱(『万国旗印』4枚)(→[40] 連絡)
- [40] 鏡→高 安政2年5月28日出(33)  
【配本】『古史成文』2部  
『菅原遺誠要文解』  
【連絡】『古史伝』続巻も送りたいが, 注文が殺到して筆写が間に合わず遅れている。『和魂漢才』はもともと「取次物」だが現在手元に一つもない。板元に問い合わせれば送る。『万国旗印』(代済)は注文しているが間に合わないので次の便で送る。(→[41] 配本)
- [41] 鏡→高 安政2年6月27日出(34)  
【配本】『明君一斑抄』(上書)  
「海外年代記」前後2帖
- 『万国旗印』1枚  
【推薦】『出定笑語』  
「海外年代記」前後2帖  
【連絡】「秘書」(写本)2冊は後便で送る。
- [42] 高→鏡 典拠(35)  
【注文】『勤孝見せばや』(→[43] 連絡)  
【支払】銀60匁(『玉襷』第8巻)
- [43] 鏡→高 安政2年7月28日出(35)  
【連絡】『勤孝見せばや』見つからず。(→[46] 連絡)
- [44] 高→鏡 安政2年8月18日着 典拠(安政2年8月26日出, 書簡(36))  
【注文】「海防之珍書」
- [45] 高→鏡 典拠(38)  
【支払】銀1分(『出定笑語』『西籍概論』)
- [46] 鏡→高 安政2年9月5日出(38)  
【連絡】『古史伝』そのほかの写本類, 安いものができたので必要なものは注文してほしい。『勤孝見せばや』は板本がない。見つかった場合書肆から連絡がくる。
- [47] 高→鏡 安政2年9月7日着  
【注文】『靈能真柱』2部(→[48] 配本)  
『古史成文』1部(→[48] 配本)
- [48] 鏡→高 安政2年9月8日出(39)  
【配本】『靈能真柱』2部  
『古史成文』1部  
「宮比神御肖像」
- [49] 高→鏡 安政2年9月17日着 典拠(40)  
【注文】『靈能真柱』2部(→[50] 連絡)  
『宮比神御伝』2部(→[50] 配本)  
『天満宮御伝記略』2部(→[50] 配本)  
『上神拜式』1(→[52] 配本)  
『大祓詞』2帖
- [50] 鏡→高 安政2年9月18日出(40)  
【配本】『宮比神御伝』2部  
『天満宮御伝記略』2部  
『万国旗印』  
【連絡】『靈能真柱』は先便で送ったので配本しない。
- [51] 高→鏡 典拠(41)  
【注文】『古史伝』第4巻から順次配本を希望。
- [52] 鏡→高 安政2年12月7日出(41)  
【配本】『玉襷』全7冊  
『神拜式』2帖  
『大祓正訓』1  
『四書道春点』1部

- 『四書道春点』小本(カナ付)4冊  
 【連絡】『出定笑語』筆写終了次第配本する。(→[53]配本)『五十音義訣』4巻,筆写中。(→[54]配本)『古今日契歴』(当用之所)・『弘仁歴運記考』品切れ中,出来次第配本する。(→[53]連絡)『神仙方術篇』『神仙方薬篇』は未清書で当分できない。『万国旗印』2枚は在庫がないので後送する。(→[53]配本)『古事記伝』神代部だけのものは出る時期がわからない。
- [53] 鏡→高 安政2年12月17日出(45)  
 【配本】『出定笑語』1部  
 『弘仁歴運記考』1部  
 『万国旗印』2枚  
 【連絡】『弘仁歴運記考』を送る予定だったが,1冊の封が不備だったので『五十音義訣』『日契歴』と同じ早春の便で送る。(→[54]配本)『古史伝』も出来次第送る。『神代御系図』小折本が完成したので,早春には4,5帖送れる。(→[54]配本)
- [54] 鏡→高 安政3年1月8日出(47)  
 【配本】『西洋年表』2葉  
 『五十音義訣』全4冊  
 『弘仁歴運記考』1部  
 『古今日契歴』2冊  
 『神代御系図』小折本6帖
- [55] 高→鏡 典拠(48)  
 【注文】『大祓詞』増刻5,6帖。(→[56]配本)  
 【連絡】今後,新刻ものは出るたびに10部くらい配本を希望。
- [56] 鏡→高 安政3年1月28日出(48)  
 【配本】『大祓詞』増刻6帖  
 『万国旗印』2枚  
 【連絡】『彖易神石圖』は後便で送る。
- [57] 高→鏡 典拠(49)  
 【注文】『五十音義訣』2冊(→[63]配本)『神代御系図』4帖(→[58]配本)『文武問答』(→[58]連絡)  
 【支払】金3兩(『五十音義訣』『弘仁歴運記考』『古今日契歴』『神代御系図』(6部),真綿代金2分,以前の書籍代の一部)
- [58] 鏡→高 安政3年2月28日出(49)  
 【配本】『太元図』4枚  
 『万声譜』1  
 『古学二千文』1冊  
 『神代御系図』4帖  
 【連絡】『文武問答』を書肆に注文した。
- [59] 鏡→高 安政3年3月18日出 典拠(50)  
 【配本】『大祓詞』  
 『太元論』
- [60] 高→鏡 典拠(50)  
 【注文】『ちまたのしるべ』(→[61]連絡)『神語考』  
 『話語指南』(→[61]配本)  
 『西籍概論』(写本)(→[63]配本)  
 『出定笑語』(写本)  
 『古学二千文』(版本)8冊(→[61]配本)
- [61] 鏡→高 安政3年3月28日出(50)  
 【配本】『古学二千文』(版本)7冊  
 『話語指南』2冊  
 【連絡】『神系圖』は未製本ゆえ後便で送る。  
 『ちまたのしるべ』は探書中。
- [62] 高→鏡 典拠(8)  
 【注文】『古学二千文』8冊(→[63]配本)
- [63] 鏡→高 安政6年6月28日出(8)  
 【配本】『古学二千文』5冊  
 『西籍概論』  
 『五十音義訣』1・2巻(写本)  
 【連絡】勘定方法を変更する。